



## 「老後とピアノ」(稻垣えみ子著)を 片手に奈良県吉野路へ

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。  
「公事宿法律事務所」代表。

神無月を迎える頃になると、私は奈良県吉野郡天川村にある天河大辨財天社を毎年参拝させていた。大抵このことにしていて。還暦まで少し時間があるものの、これから的人生をどのように過ごそうなどと少しずつ真剣に考えるようになつたのは、今年の春に父が亡くなつたことと深く関連しているのかもしれない。司法試験に合格してからあつとう間に30年以上の月日が経過して

だからではないかと思っている。たまに所属してヴァイオリンを弾いていたま合格したから言えることかもしれないが、「試験合格」という目標かもしれないが、「クラシックに没頭するこらすれば、クラシックに没頭することは、あまりにも遠回りの道のりである

あるはずが、後になって自らの人生を振り返れば、実は結構近道ではなかったのかと思うことがある。ある1つの目標からすれば、何の脈略も関連性もない物事を一杯し続けることで何かに気が付き、何かが見えてくるとでも表現することができようか。管弦楽部内には、演奏会でどのような曲を演奏するのかを各パートのトップたちと話し合って検討する選曲委員会というものがある。大学オケの特徴をよく理解する。大学監督の意向も参考にしながら最終的に曲が決まる。曲が決まれば、私はコンマスとして演奏会が終わるまでの間、しばしば大学図書館の視聴覚室にこもり、同じ交響曲等でありながら、数多くの指揮者がタクトを振つて録音されたさまざまなおーケストラのレコードを聴きまくり、これと併行して音楽史の著作を読んで練習を続けていた。また、アルノルド・J・トインビーの「歴史の研究」を紐解いては、曲が作られた歴史的背景を学んでいると、高校時代

しまつたが、人並みに合格できたのは、大学4年間にわたつて管弦楽部に所属してヴァイオリンを弾いていたからではないかと思っている。たまたま合格したから言えることかもしれないが、「試験合格」という目標かもしれないが、「クラシックに没頭するこらすれば、クラシックに没頭することは、あまりにも遠回りの道のりである」ときものなのである。

稻垣女史のこの書籍は、ピアノをはじめていた山川出版社の「世界史」に記載されていた二つひとつが、つまり、点と点が線で結ばれたこともないが、「試験合格」という目標かもしれないが、「クラシックに没頭するこらすれば、クラシックに没頭することは、あまりにも遠回りの道のりである」ときものなのである。

さて、今回、天河大辨財天社に赴く際にお供してくれた本は、稻垣えみ子さんの著作である「老後とピアノ」(ポプラ社)である。50歳で朝日新聞社を退職した稻垣女史が40年ぶりにピアノを習つことから物語は始まる。稻垣女史はいう。「聴くと音を奏でることで、自分が『曲そのもの』になるということなのだ。弾くことでは大違ひなのだ。弾くことによって、つまり自分の身体を使って音を奏でることで、自分が『曲そのもの』になるということなのだ。」

だつた時は全然気づかなかつた作曲家の深いところに気づくことができた。そうなのだ、楽譜を読み、苦労しながら練習するということは、作曲家と『出会い』ことなのだ。「老後」を私は抱に付けている。私にとっては音を奏でる、音を聞くことは「人」というものを考へるきっかけを作ってくれる大切なものの。五十鈴が奏でる音をわずかな時間でも日々聞くことで『ジーン』となつて「人」を深く考へるきっかけとしていきたい。

曲を通じて歴史を学ぶ。曲を通じて歴史を学んでいると、高校時代

に使つていた山川出版社の「世界史」に記載されていた二つひとつが、つまり、点と点が線で結ばれたこともないが、「試験合格」という目標かもしれないが、「クラシックに没頭するこらすれば、クラシックに没頭することは、あまりにも遠回りの道のりである」ときものなのである。

稻垣女史のこの書籍は、ピアノを通じての話題が中心であるが、実は、中年以降の私たちが何に向かつて、どう生きていいくのかという大切なことを考へさせてくれる素晴らしい本なのである。残念ながら、私が40年以上ぶりにヴァイオリンやヴィオラを手に取ることはないだろう。しかし、オケ活動に徹したともいい得る大学時代をいまさらながら振り返り、前を向いてこれからのことを考えると、稻垣女史がいふとおり、「下手だつてなんだつて、一つのフレーズ、一つの和音を『弾く』。ただそれだけで、…自分の出した音に自分の魂が震える」當みに結びつく静かな日々を過ごしていくことが大切だと思ふ。

毎年いただく五十鈴守り(根付け)を私は抱に付けている。私にとっては音を奏でる、音を聞くことは「人」というものを考へるきっかけを作ってくれる大切なものの。五十鈴が奏でる音をわずかな時間でも日々聞くことで『ジーン』となつて「人」を深く考へるきっかけとしていきたい。